



「世界の諸地域」の指導と評価の一体化

—「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」の観点を中心に—

東京都 お茶の水女子大学附属中学校 教諭 渡邊 智紀

1. はじめに

本誌では2022年度前期号の石井氏を皮切りに、4氏の指導と評価の一体化に関する理論や実践が紹介されてきた。授業と表裏一体である評価活動をどのように行うべきか、先生方の関心が高いことの証左であろう。私も研修会や学習会などを通して、このことを実感している。

本稿では2学期以降に学校現場で役立てていただくことを念頭に、『社会科 中学生の地理』（以下、教科書）第2部第2章「世界の諸地域」を事例に、地理的分野の指導（授業）と評価の一体化の工夫について具体的に述べていく。帝国書院の年間指導計画案によると、この内容のまとまりは1年生の2学期から3学期にかけて指導することになっている。『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料「中学校 社会」でも、内容のまとまりを一つの単元として設定し、評価規準を設定する手順が示されていることから、夏期休業等を利用し、2学期から3学期の長期にわたる単元の授業と評価を一体のものとして計画しておくことが望ましい。見通し（到達点）を定め、たうえで授業や評価活動にあたっていけば、生徒の実態等に合わせ、絶えず到達点との位置関係を把握しながら修正・調整することが可能になる。生徒に自己調整力を高めることが求められているのと同じように、教師の授業・評価活動にも同様の力が求められているといえる。

2. 育成する3つの資質能力と単元の構成

では、具体的に計画を立てていこう。初めに、単元の学習を終えた時点で生徒にどのような姿になってほしいか、学習指導要領の目標や

学校の教育目標等を参考に想像してみたい。ここでは目指す生徒の姿を「地域的特色および地域でみられる地球的課題の成り立ちの要因や影響を、関連付けて多面的に考察、表現でき、理解できているとともに、みずから資料を収集・読解したり表現活動に活用したりするなど、学習への関心を高め主体的に追究しようとしている生徒」としておく*。この姿を表す言葉を入れ込んで、単元の目標および評価規準の文言を作成する。

次に、このような生徒を育てるために、単元（各州）の学習順序をどのように配置すると効果的かを検討する。教科書はアジア州からオセアニア州の順に並んでいるが、当然ながらこのとおりに進める必要はない。地域的特色のつかみやすさや技能（資料の読み取りや表現させる方法）の習熟、地球的課題の背景の複雑さなどの難易度から考えることや、生徒の関心や時事的な社会の動きを踏まえること、あるいはそれらの複数を組み合わせることが考えられる。ここが教師の腕の見せどころである。本稿では、教科書で示されている地域の主題や地球的課題の背景の関連性、生徒の技能の習熟過程等を勘案し、表のような学習順序を構想した。

時数等は帝国書院の年間計画案によった。表

表 州の学習順（案）と教科書の地球的課題
(色分けは単元のまとまりを示す)

	州名	時数	地球的課題	
①	北アメリカ	5	生産と消費	2学期
②	アフリカ	4	食料問題	
③	南アメリカ	4 + 1	熱帯林の破壊	
④	アジア	7	都市・居住問題	3学期
⑤	ヨーロッパ	6	経済格差	
⑥	オセアニア	3 + 1	多文化の共生	

*太字は「知識・技能」、ゴシック体は「思考・判断・表現」、ゴシック斜体は「主体的に学習に取り組む態度（以下、態度）」の3つの資質能力を意識していることを表している。

内で「+1」としているところは、それまでの各州を一つの「まとめり」ととらえ、それぞれの「まとめり」ごとに「**思考・判断・表現**」および「**態度**」の評価資料を集めるための時間をとることを意味している（課題や作業内容については、後述する）。なお、複数の州の学習をまとめて評価する先行研究として、2021年の全国中学校社会科教育研究大会東京大会で発表された、東京都中学校社会科教育研究会（地理専門委員会）の実践も参考にされたい。

3. 単元を見通した評価計画の作成

(1) 「知識・技能」

このような学習順序および「まとめり」を基に、具体的な「評定に用いる評価」を行う場面を計画する。①～③の州は2学期、④～⑥の州は3学期の評価範囲とする。

「**知識・技能**」については、教科書の「節の学習を振り返ろう」の「□学んだことを確かめよう」の自己学習結果、および定期テストなどを用いて評価資料を収集する。定期テストでは、語句を答えさせるような問題だけではなく、地域的特色に関して説明するような深い知識や、地球的課題の現れ方が地域により異なるといった概念を問うような問題も含めることで、生徒の知識が、記述的知識から説明的知識^{*}へと高まっているかを確認したい。また、時数的に考えるとアジア州の途中で冬休みを挟むことから、①～④の途中までの学習成果を生かして、アジア州でみられる地球的課題についてみずから調べ、地図を用いてその広がりや場所を示したり、課題の現状を示す写真やグラフ等を用いたりして表現させる課題を出し、その成果物を社会的事象等について調べまとめる「**技能**」の評定に用いる。もちろん、この成果物は評価資料としてだけでなく、3学期に行うアジア州の地球的課題を考える授業の資料としても活用することができる。

(2) 「思考・判断・表現」および「主体的に学習に取り組む態度」

「**思考・判断・表現**」と「**態度**」については、州の「まとめり」ごとにあらかじめ考察すべき大テーマを生徒に示しておき、それに対して自

分は学習を通してどのように考えたか（**思考**）、また、学習の工夫や努力ができたか（**態度**）を記述させるワークシートを作成して、「まとめり」の最後の（表で+1と表示した）時間で2観点の一体的な評価資料として収集することを想定している。

具体的に追究する大テーマの例を示すと、次のようになる。①～③の「まとめり」では「私たちが生きるために必要な『食料や資源』の生産や消費に関して、世界ではどのような特色や課題がみられるだろうか。」といった大テーマを生徒に示し、授業を通して追究することで、北アメリカ、アフリカ、南アメリカ各州の特色や課題の違いを考察することができると考える。同様に④～⑥の「まとめり」では、「さまざまな立場にある人々が『共によりよく暮らす』ために、乗り越えなければならない課題や、課題を乗り越えるための工夫はどうあるべきか。」のような大テーマが考えられる。

このような大テーマを、各「まとめり」の導入の時間で、生徒の追究する意欲や関心を高めながら共有する。そして、大テーマに対する予想や導入の時点で自分の考えを、用意したワークシートに書かせる。そして、「まとめり」の最後の時間に、大テーマに対する考えや自分自身の追究過程の振り返りを書き、それが「評定に用いる評価」の資料となることと、その評価基準がどうであるかを伝える。評価基準については、大テーマについて複数の州の特色および課題の事例を取り上げ、比較・分類するなど適切に関連付けて多面的に考察、表現できているものをBとし、その考察の程度が高いもの（例えば、全体を統合して概念化しているなど）をAとすることを想定している。

また、あわせて、各州の学習を進めている段階でそれらがどのように変化したり、学習を通して新たな発見があったりしたかなどを、振り返りシートやノートなどの指定された場所に記入する必要があることも、あらかじめ生徒に伝えておく。事前にどのような評価活動をするかについて生徒と情報共有しておくことは評価の信頼性や妥当性を高めるうえで大切なことである。なお、途中の振り返りを記入する回数や場

所（ノートや授業プリント、振り返りシート、ICTの活用など）は、各先生方のやり方があると思われる。それらにひと工夫を加えることで、生徒が適宜、大テーマに対する答えを思考したり、学習を振り返ったりできるような枠組みを作っておきたい。帝国書院「指導書Webサポート」の「学習の見通し・振り返りシート」を利用したり、これを基に自分なりのシート（図）を作ったりすることも考えられる。

学習途中での振り返りは、州の学習が終わった時点などの適切なタイミングで提出させて確認し、アドバイスすることを忘れないようにしたい。注意したいのは、ここで得られた情報はあくまでも「学習改善に用いる評価」として使用するということである。すなわち、ABCをつけることよりも、未提出の生徒にはそのことで声をかけることや、提出した生徒には、提出物の内容や学習状況に関するアドバイスをすることを優先するという意味である。このように、教師から生徒に対して日頃から継続的にアドバイスをする機会を作ることは、教師と生徒が学習の方向性を共有し、評価の信頼性や妥当性を高めることにもつながる。

さらに、生徒の提出物から得られる情報は、教師の授業改善にも大きく役立つ。生徒がテーマに対して考えられていない場合は、教師自身がテーマを意識した授業を構成できているか、資料は適切であるかなどを改めて見直すよい機会となるだろう。教師の働き方も考えながら、生徒へのアドバイスや教師自身の授業改善を進めていきたい。

4. 学習改善に用いる評価の充実とICTの活用

このような「学習改善に用いる評価」を進めるにあたっては、各学校に整備された一人一台端末など、ICTの活用が大変有効である。例えば、Google for EducationのClassroomでは、教師が作成したワークシートを生徒にコピーして配布・共有し、それにコメントをつけることが可能である。このような機能を活用すれば、配布・回収の手間を減らし、オンラインでコメントができるなど、効率的かつ有効な評価活動（情報収集）が可能になる。学校の実態にもよ

学習の見通し・振り返りシート ①
(地理的分野 第2部 第2章 第4節 北アメリカ州)

【大テーマ】「まどまり」を通して考えること
私たちが生きるために必要な『食料や資源』の生産や消費に関して、世界ではどのような特色や課題がみられるだろうか。

第4節の問い 北アメリカ州では、アメリカ合衆国を中心に巨大な産業が発達した結果、地域にどのような影響が生じているのだろうか。

節の見通し

(1) 「節の問い」について、学んでみたいことや、疑問に思ったことを自分の言葉で表してみよう。

(2) 解決のために、何が分かればよいか、どのようなことを調べればよいかなど、見通しを立てよう。

学習前の予想・学習後の振り返り

本時の項目と学習課題	学習前の〈予想〉や学習後の〈振り返り〉	★【大テーマ】に関連する特色や課題に線を引こう
1. 北アメリカ州の自然環境 北アメリカ州の自然環境には、地形や気候にどのような特色がみられるのだろうか。		
2. 移民の歴史と多様な民族構成 北アメリカ州に多様な民族が集まったことは、地域にどのような特色をもたらしたのだろうか。		

図 学習の見通し・振り返りシート（筆者作成）

るが、積極的に利用していきたい。

話は戻るが、前述の「技能」の評価に関する課題についても、家庭でICT機器を利用して取り組むことが考えられる。学習指導要領解説の参考資料3「社会的事実等について調べまとめる技能」の中に、情報を収集する技能として「コンピュータや情報通信ネットワークなどを活用して、目的に応じて様々な情報を集める」技能、情報をまとめる技能として「情報機器を用いて、デジタル化した情報を統合したり、編集したりしてまとめる」技能が示されている。歴史的分野での指導との兼ね合いも視野に入れながら、系統的な技能の育成やICTの活用力の育成についても考えておきたい。

※森分（1984）は、社会的な事実を概括した知識を記述的知識、2つ以上の記述的知識を因果的に結び付けたり、社会的な法則や理論（一般的説明的知識）を用いて推理したりして生まれた知識を個別的説明的知識と呼んだ。

（参考文献）

- ・ 国立教育政策研究所 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校 社会』 東洋館出版社、2020年
- ・ 全国中学校社会科教育研究大会 東京大会当日配布資料「8（地理的分野）地理専門委員会分野別提案」（最終閲覧日2024年2月26日）
<http://www.zenchusya.com/wp-content/uploads/73da5480bf927cdd3856eedb8624f6fb.pdf>
- ・ 森分孝治『現代社会科授業理論』明治図書、1984年
- ・ 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編』東洋館出版社、2018年

帝国書院
年間指導計画は
こちら→



本授業研究の
ワークシートは
こちら→

